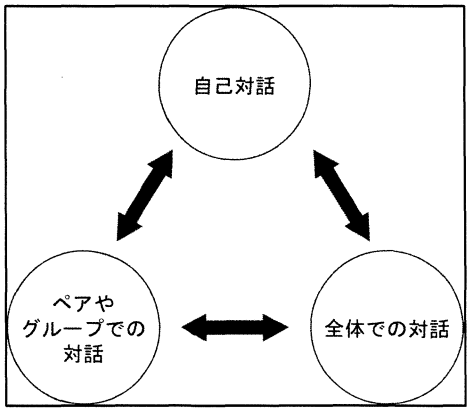
対話が生まれ，学びが深まる授業づくり

高度学校教育実践専攻教職実践高度化系
教員養成特別コース　　実習責任教員　川　上　綾　子
古　屋　夏　海　　実習指導教員　葛　上　秀　文

キーワード：対話，深い学び，授業づくり

1．課題設定の理由

筆者の目指す授業は，問題を思考する中で対話が生まれ，その対話からさらに学びが深まる授業展開である。ここでの対話とは，「自分自身で考え自分の意見を持つための自己対話，自分の意見を相手に伝えると共に，他の人の考えを知るための児童同士の対話，意見をクラス全体で共有することでさらに学びを深めるための全体での対話」の３つであると考える。（図 1）



【図１：３つの対話の関係図】

基礎インターンシップの授業実践では，グループで話し合う時間を作り，対話が生まれる授業展開を行う予定であったが，時間にとらわれ，教師の発言が多い授業展開になってしまった。また，答えだけを問う閉じた発問や問い返しを行ってしまい，対話が生まれなかった。以上を踏まえ，児童が自分の考えを持ち，他者との対話から学びを広げたり深めたりすることができるような授業づくりを行いたいと考え，本課題を設定した。

2．１年次の実践研究

１年次の前期授業科目の「教職協働力実践演習」で行った模擬授業と，主免教育実習，基礎インターンシップの授業内容は次の通りである。

実施日と場面	教科・学年・単元
①2019. 6. 29 教職協働力実践演習	算数科・小学校第５学年 面積
②2020. 9. 30 主免教育実習	国語科・小学校第３学年 修飾語を使って書こう
③2020. 11. 11 基礎インターンシップ	算数科・小学校第６学年 比例と反比例

(1)「教職協働力実践演習」の振り返り

この単元では，直角三角形の面積の求め方をワークシートや縮小した直角三角形の紙（以下，縮小図）を実際に手に取って考える授業を行った。ワークシートや縮小図は児童の自由に使用して良いことにし，図形を切ったり組み替えたりして考えることを期待して授業構成を考えた。

筆者は，縮小図を切ってしまったら元の図形が分からなくなってしまう可能性を考え，ワークシートには自分の考えを，縮小図は自由に扱ってよいという位置づけで用意していた。しかし，実際に活動を行ってもらうと，児童役の方々には別の活動のように見えてしまった。

この実践を通して，児童からどんな見方・考え方が出てくるか柔軟に予想しておくことや，児童にとって活動しやすい補助教材，活動を考えることの大切さを実感した。筆者が考えた授業構成では，児童が考える場面で活動を２つに分けていたため，児童の思考を狭める形になっ

てしまっていた。もっと自由な発想が生み出せる活動や補助教材を取り入れることで児童の思考も深まり，対話が生まれ，学びが深まる授業になるのではないかと考えるきっかけとなった。

(2) 主免教育実習の振り返り

私が行った授業実践では前半に体験的な活動はあまりなく，授業の後半に集中してしまっていたので，結果としては児童に「できた！」という充足感を持たせることができていたが，前半部分は児童にとってつまらない内容になってしまった。このように，教師主体の授業展開を行ってしまうと児童自身が考えを深める機会を奪ってしまうので，児童が常に考えたり，体験したりする活動を取り入れた児童主体の授業展開を考えていくべきであったと考える。

一方，意識して授業の後半にグループ活動を取り入れたことで，児童同士で話し合い考える様子を見ることができた。一人では4つも修飾語を考えて文を作ることが難しい児童でも，他の児童と協力することで，より詳しく分かりやすい文を作れていた。グループ活動を入れたことで児童同士の対話が生まれ，児童の考えをさらに広げることができたと考える。ただ，課題として，①一人で考える時間がないままグループ活動に入ったため，自分の考えが深まったかは分からないこと，②グループ活動を行う際は，児童同士で時間をかけて考えることが大切なので時間配分を考えること，が挙げられる。

(3) 基礎インターンシップの振り返り

この授業では，2つの事象を比べることで比例ではないものに気がつき，表を横や縦から見て関係性を考える活動や周りに説明する活動を通して，反比例の定義や反比例する2つの量の間のきまった数について理解することができることを目的として授業実践を行った。

授業の振り返りを通して2つの課題が明らかになった。課題の一つ目に児童同士の対話が生まれる活動を取り入れられなかったことである。これは，既習事項の確認を丁寧に行い過ぎたため，導入部分が長くなってしまい教師が喋りすぎる教師主体の授業展開になってしまったからである。結果として，時間に追われ，個人で考える活動や周りと話し合うグループ活動の時間を十分に取ることができなかった。

二つ目は，児童の思考を引き出すような発問・問い返しができていないことが挙げられる。プロトコルを確認すると，児童から答えしか引き出せず，問題を考えた理由や根拠を問い返すことができなかった。結果として，クラス全体で問題を考えた経緯や考え方の共有を行えなかったので，児童の学びが深まらなかった。

以上の課題を総合インターンシップで改善するために，以下の2点に気をつけていきたい。

i．対話が生まれるような学習形態・学習方法

基礎インターンシップでは学級の実態に合わせて児童同士で対話する場面を作ることができなかった。よって，総合インターンシップではまず学級の実態把握に努め，その学級にはどんな対話の方法や場の設定が適切かを考えたい。対話については上記図1の3つが重要であると考えるので，この3つを学級の実態に合わせてバランス良く取り入れたいと考える。発言が多いクラスではクラス全体での対話を，クラスではあまり発言しないが友達となら話し合える児童が多いクラスではペアやグループでの対話を多くするなど，学級の実態に合わせた授業づくりを行っていく。

ii．児童の学びが深まるような発問・問い返し

今回の授業のプロトコル分析の結果，「えーっと」「ちょっと」「あの」など授業の内容と関係

のない発言が多くなってしまい，話している一文が長くなっていることが明確になった。一文が長いと，児童が今何を聞かれているのか分からなくなってしまうので，総合インターンシップでは，本当に聞きたい事や指示だけに絞ったシンプルな発問を心掛けたい。その際，事前に児童の実態を考えて細案を作成しておくことで，授業の流れも把握でき，発問もシンプルにできると考える。また，基礎インターンシップでは2択で答えられるような閉じた問い返しを行ってしまっていたので，児童が問題を考えた理由や根拠を尋ねる問い返しを心掛けたい。

３．２年次の実践研究

総合インターンシップⅠ・Ⅱでは小学校第2学年で以下のような授業実践を行った。

実施日と場面	教科・学年・単元
①2021.5.21 総合インターンシップⅠ	算数科・小学校第2学年 長さ
②2021.10.26・28 総合インターンシップⅡ	国語科・小学校第2学年 主語と述語に気をつけよう

(1)総合インターンシップⅠの振り返り

授業実践を行う際，新型コロナウイルス感染症拡大により，児童同士の話し合い活動に制限が生じ，グループやペアでの活動を行うことができなかった。よって今回は，児童同士の対話を少人数ではなく，クラス全体で行い，その中で児童の学びが深まるような発問・問い返しができるような授業を考えたいと思い，臨んだ。

【成果】

①児童の発見を全体に取り上げ共有したこと

自分の身のまわりから10cmくらいのものを探す活動の場面で，筆者が想定していた以上のものを児童が見つけた際に，全体に共有することができたことである。筆者は，のりやホッチキスなど教科書に載っているものが主に出てくると想定していたが，カスタネットを開いた時の直径の長さや，算数の授業で使用した置き型時計の下の長さが10cmくらいと発見できた児童がいた。机間指導を行う中で，こういった他の児童も気づいていないものを全体に取り上げ共有することは，他の児童にとっても新しい発見となり学びが深まったのではないかと考える。

②学びが深まる発言を引き出せたこと

振り返りの場面で他の児童にとって新しい発見につながる発言を引き出せたことである。当初，振り返りの場面では，授業を通して分かったことのみ発問する予定であったが，気づいたことも一緒に訊いた方が児童も自分の考えや発見したことを発表しやすくなると思い，「分かったこと・気づいたこと」の2点について訊いた。その結果，テープの円の直径ではなく，円周を測ってみたという新しいユニークなものの見方をしていた児童の発言に対し，他の児童から「へぇ～すご！」という反応が現れるなど，発表者以外の児童にとって新しい発見につながり，学びが深まったのではないかと考える。

【課題】

①教材設定が不十分であったこと

児童の作業に時間がかかりすぎてしまうことを考慮して4本の紙テープの図から10cmの長さの紙テープはどれか予想するクイズ形式の問題を出した。しかし，授業の振り返りを通して，50cmほどの紙テープを用意し，自分の思う10cmの長さをハサミで切らせる活動を行った方が，児童が10cmがどのくらいか予想したり，実際の10cmと切った長さを比べた時に自分の予想との差を実感できたかもしれないとの考えに至った。教材との対話は，自己対話そのものであり，教材と触れ合いながら自分で考えることは，ペアやグループでの対話・全体での対話に繋がってくる重要な活動の1つであったと考える。

②発言が長く，明確な指示が出せていないこと

基礎インターンシップの授業実践よりは，意識して短くゆっくりと発言したつもりであったが，プロトコルを確認すると，活動の説明をすることに必死になってしまい，複数の指示が混ざってしまったり，何度も同じ内容を繰り返し発言していることが分かった。これでは，本当に聞きたい事や指示だけに絞ったシンプルな発問ではないため，児童も何が指示されているのか分かりづらくなってしまっていたと考える。

(2)総合インターンシップⅡの振り返り

この実習では新型コロナウイルス感染症の影響も弱まってきていて，ペアやグループでの活動を取り入れても良いという判断を学校側から言われたので，子ども達同士の対話が生まれ，そこから学びが深まるよう，授業計画の際に積極的にペア活動やグループ活動を取り入れた。

【成果】

①発問・問い返しで深掘りできたこと

最初に教師がとぼけることで，児童から間違っているという意見が現れ，なぜ間違っていると思うのか理由を聞き出すことができた。また理由を話した際に言葉が不足していると考え，さらに問い返して深掘りすることができた。

②学習活動が遅れている児童への声掛け

ワークシートが書けていない児童への支援として，友達の書いた発表を聞いて，それを参考に自分で文を作るように声掛けを行った。授業後に，児童のワークシートを回収しすべて確認したところ，3 つ文を書けるところがあるうちの 1 つは全員，文を書くことができていた。

【課題】

①板書に時間がかかりすぎた

来年度を見越して板書中心の授業計画を立てたが，丁寧に書こうとしすぎて時間がかかってしまい，結果として 1 つ 1 つの活動時間が延び，想定していた活動をすべて終えられなかった。

②説明が長くなりすぎてしまった

今回初めて主語と述語を児童が学ぶので，正しい知識を教えなければと意気込んでしまったため，主語では「誰が(は)」「何が(は)」，述語では「どうする」「どんなだ」「なんだ」の部分を児童から引き出したり，説明するときに丁寧に行いすぎてしまい，結果として説明が長く教師の教え込み型の授業展開になってしまった。

③活動の指示が明確でなかった

活動の指示が，班になって一人一人発表し合うこと，時間は 2 分くらい取ること，の 2 点しかないまま班活動を進めていた。対話のための場は設定したが，大まかな指示のみで細かい指示がなかった。その結果，発表者を決めるためのジャンケンをしている班や，誰が先に発表するかで揉めている班が出てきてしまった。

④児童の思考が掴めずに発問してしまった

児童が 1 年生の時の既習事項を考慮せずに筆者が発問してしまったため，発問の意図が児童に伝わらない場面があった。既習事項を踏まえて児童の思考の流れを掴んでおく必要があった。

4．今後の展望

2 年間の長期実習を通して，①1 人で考える時間，ペアやグループで考える時間，全体で話し合う時間を授業構成に取り入れること，②児童の思考を引き出して，学びが深まるようにするためには発問・問い返しの重要性が高いこと，③児童の思考の流れから考える教材研究・教材設定の 3 点が重要であると分かった。今後も，筆者がテーマに掲げている「対話が生まれ，学びが深まる授業づくり」になるよう，上述した 3 点を常に意識し，児童の実態を考えながら授業づくりができるように励んでいきたい。